

# 審判員派遣報告書

|       |                    |      |                 |
|-------|--------------------|------|-----------------|
| 派遣事業名 | 全日本大学バスケットボール選手権大会 | 派遣期日 | 令和4年12月6日～12月7日 |
| 報告者   | 藤田公介               | 派遣先  | 東京都大田区総合体育館     |

## 1 大会概要

|      |  |      |                  |
|------|--|------|------------------|
| 大会名称 | 同上   | 大会期間 | 令和4年12月3日～12月11日 |
| 大会概要 | 各ブロックの代表チームが集まり、大学生の日本一を決める大会である。今年はシード校以外は3チームの予選リーグが行われ、各リーグ1位が決勝トーナメントに進む形式に変更となった。 |      |                  |

## 2 担当試合 ※（試合内容は簡潔に書いてください）

|       |   |    |          |
|-------|---|----|----------|
| 日程    | 令和4年12月6日   | 会場 | 大田区総合体育館 |
| 審判クルー | CC:長谷川裕（神奈川） U1:飯塚貴行（神奈川） U2:藤田公介   |    |          |
| 担当試合  | 男子予選リーグ 北陸大学 VS 広島大学  |    |          |
| 試合内容  | 外国人選手がいる北陸とスピードのある広島の試合で、終始接戦で試合が進んだ。どちらも攻守ともにタフにバスケットを展開し、87-71で北陸大学が勝利した。 |    |          |

|       |   |    |          |
|-------|---|----|----------|
| 日程    | 令和4年12月7日   | 会場 | 大田区総合体育館 |
| 審判クルー | CC:西和馬（徳島） U1:藤田公介 U2:早川貴章（新潟）  |    |          |
| 担当試合  | 男子決勝トーナメント 東海大九州大学 VS 京都産業大学  |    |          |
| 試合内容  | 外国人選手を擁し高さで上回る京都産業に対し、パッシングオフェンスでスピード感のあるバスケットを展開した東海大九州。シュートを打つチャンスは多くあったが、それが得点に繋がらず、55-94で京都産業大学が勝利した。 |    |          |

・レフェリーディフェンス

アクティブなマッチアップに対して、どのようにレフェリーディフェンスをしていくかが課題である。ディフェンスの身体の中のどの部分がアクティブで、その後の展開でファウルに発展していきそうか、その際の POC は何になるのかを考えて、ポジションアジャストをする必要がある。POC をはっきりと捉えるためには、それを確認できるアングルの確保が必要である。レフェリーディフェンスをしているが、ディフェンスの何を判定するためのレフェリーディフェンスなのかを考える必要がある。ディフェンスの身体全体を漠然と捉えるのではなく、アクティブな POC を捉えていくことが重要である。

・C と L の Primary Area / Angle

C サイドからベースライン側へドライブがあった時、C と L でダブルコールにあるケースがあった。POC とアングルによって、Primary が C なのか L なのかが決まってくるケースであるので、L の時により一層注意して C サイドからのドライブに対応していきたい。特に L の Area でアクティブなマッチアップがない時に、逆サイドからのドライブに意識を向け過ぎていると、コンタクトに対して反応してしまいがちになるので、気をつけたい。

・クルーワーク

トランジション→ブレイクが起こり、後ろから外国人選手が追いかけていくケースがあった。C サイドからレイアップに行き、後方からボールがバックボードに触れるのとほぼ同時にブロックがあった。C として、GT / BI の判定をしながらも、DF のコンタクトの有無、そしてそれがリーガルなのかイリーガルなのかの判定もしなければならず、難しさを感じた。試合後の MTG で、そういう時こそクルーワークを発揮する場面で、C が Foul に対しての Primary、L が Secondary、T が GT / BI に対して判定を下したらいいと助言いただいた。クルーワークが必要な具体的な場面を、PGC で確認し共有しておく重要性を感じた。自分が担当した試合で起こった特殊なケースを蓄積し、共有できるようにしていきたい。

最後に

夏のインターハイを通して、多くの県内審判員が切磋琢磨し、自身の審判技術向上に向けて取り組んだ。2年連続全国大会を開催するにあたり、審判技術だけでなく、県内審判員の気持ちの面に対しても関わり方を工夫し、接していかなければいけないと感じている。私自身、次のステップへ研鑽を積んでいくとともに、全国大会開催に向けて香川県に貢献していきたいと思う。

最後になりましたが、今大会に派遣して頂きまして、感謝申し上げます。今後とも、ご指導宜しくお願い致します。